

在儀可被行被宣命之由、雖爲問題之端、今度事、彼叡慮不知之由、有風聞、就其祖父女院度々御難澁、而依武命之嚴密、女院御許容云々、然者、爭可在、如在禮哉之旨、予殊申入了、寛和花山院御出家翌日、以如在禮被下詔命之由、雖有所見、今度儀曾不相似歟、大王光嚴年來故資名大納言入道養君入道薨去後、後室禪尼奉養育、可有御入室妙法院門跡之由、而如此聖運至、凡慮難覃事也、御年十五歲、新院御同胞也、未及立親王、

〔匡遠記〕觀應三年六月三日甲辰、武家使節道譽向勸修寺亞相亭三宮後光嚴御登壇、并女院廣義門院政務事令執申云云、五日丙午、勸修寺前亞相今日向武家、仰一昨日御返事云云、兩條女院被仰子細之由有其聞、九日庚戌、匡遠今日參向處々、御位事、武家令執申之趣、女院平以御不受之由、人人語被申也、十八日己未、武家使節道譽向勸修寺前亞相亭、三宮御事猶申入之、十九日庚申、前亞相今日向武家、一昨日御返事云云、三宮御事再三令申入之間、女院無力御領納云云、廿一日壬戌、匡遠今日參向處々、三宮御位事、就武家申入、既御治定之由、人人被申之、

〔重綱記〕觀應三年八月十七日丁巳、太上天皇第三宮繼仁後光嚴御年十五、可有踐祚之儀、仍關白殿御參向于時皇居土御門北東洞院東頰以西口長講堂大納言御早出、上卿左大臣殿略中等參陣了、

〔椿葉記〕崇光院は光嚴院第一の皇子にて、後嵯峨院以來皇統にてまします、御在位わづかに三年、天下みだれて觀應二年十一月七日、南朝より取奉りて御位を廢す略中さて東宮仁直は廢せられて、光嚴院第二宮光嚴同八月十七日踐祚あり、父の御ゆづりにもあらず、武將足利の足利はからひととして申行ふ、

〔續神皇正統記後光嚴〕抑此君御位の事、并女院廣義門院御政務事、大樹足利頻に執申されけるに、女院御固辭、都て不可叶之由被仰ければ、本院光嚴以下山中に御坐之間、彼御ため御離たるよし深く思召入ける故とぞ、大樹執柄へも申談られけり略中近衛院御晏駕時、いづれの皇子をも